いじめの傍観者を抑止するために必要な視点とは何か

――フィンランドのいじめ防止プログラム（KiVa）の効果をめぐって――

原　　清　治
浅　田　　瞳

【抄録】

近年のいじめ問題はコロナ禍を経て新たなフェーズに移行したという論考が増えつつある（原，2020）。2020 年に減少したかに思われたいじめ認知件数は近年増加の一途をたどり，とりわけ小学校での認知件数は過去最高を更新している。

いじめ研究においても，重要な理論のひとつである「四層構造論」（森田洋司，1986）について新たなモデルの検討を指摘する声が高まっている。四層構造論が提唱されてから 40 年近く経過したことにより，当時のいじめでは想定されていなかったインターネットを用いたいじめや学校における子どもたちの序列（スクールカースト）など，子どもたちの実態との乖離が大きくなってきたためである。

しかし，現代のいじめにおいてもいじめの現状を知りながら積極的に関与しない「傍観者」は一定数存在し，彼ら彼女らにどのような指導をするのかという課題は依然として解決していない。

また，いじめ研究は潤沢な先行研究を有する分野にも関わらず，「傍観者」を分析対象としたものは僅少であり，その多くは教育心理学的アプローチを前提としたいじめ防止プログラム作成における傍観者対策に言及したものである。海外ではオルヴェウス（Olweus, 1998）の考案したノルウェーのいじめ防止プログラムとフィンランドで開発された KiVa プログラムがその典型である。とりわけ，KiVa プログラムはフィンランドのみならず世界各国で活用されているいじめ防止プログラムであり，その特徴はいじめの傍観者を擁護者（いじめを止めたり注意したりする子どもを指し，森田の四層構造論における「仲裁者」に該当）に変える点にある。

だが，その KiVa プログラムも必ずしも効果を持ち得るとは言い難いという指摘も見られる（原，2023）。

本論文では，以下の 2 つの点について検証を行った。

①科研調査データを用い，いじめの傍観者はどのような性質を有しているのかを明らかにし，森田の四層構造論について検証を行う。そのうえで，いじめを傍観する子どもたちに対して，どのような視点が必要なのかを明らかにする。

②フィンランドの KiVa プログラムを概観し，その特徴と課題について明らかにする。とりわ

け，KiVa プログラムの課題がどこにあるのかについて提示する。

結論として①いじめの傍観者は仲裁経験との相関が強いこと，②フィンランドの KiVa プログラムは傍観者に一定の効果をもつこと，③今後の日本の子どもたちは，いじめの傍観者でもなく，いじめそのものを共有していない言わば「知らない」子どもが増えることが予想され，連帯責任では解決できないこと，の 3 つを指摘した。

1. はじめに

我が国におけるいじめ研究の端緒は 1980 年代からと論じられている。当時の文部省がいじめの定義を提示したのは 1985 年であり，その定義作成に携わった森田（1986）は，いじめのある学級にはいじめの被害者，加害者，観衆，傍観者の四層に分かれており，この状況がいじめを助長していると指摘[1)]した。いわゆるいじめの四層構造論である。当時のいじめ研究において，いじめは校内暴力や暴走族などの少年非行のひとつにすぎず，いじめは被害者と加害者の人間関係の齟齬の延長にあるものといった指摘が多かった。しかし，森田はいじめのある学級では被害者と加害者だけではなく，いじめをはやし立てる観衆やいじめを見て見ぬふりをする傍観者がいることで，いじめが見えにくく，いじめを止める力が働きにくくなる点を指摘[2)]した。

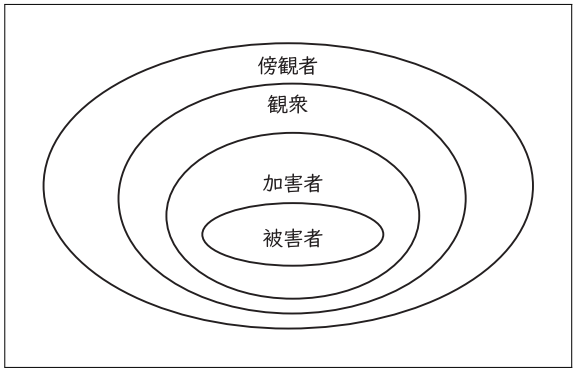

図 1　森田の四層構造モデル
（出典）森田洋司・清永賢二『いじめ－教室の病い』金子書房　1986 年　p.31 より筆者作成

このいじめの四層構造論は我が国のいじめ研究において重要な示唆を与えた。とりわけ，森田はいじめの観衆や傍観者であっても被害者や加害者に転じる点から，子どもたちは被害者になることへの忌避から，学級において機能不全に陥りやすいこと[3)]も指摘し，いじめ問題が当事者間の問題ではなく，どの学級や学校であっても生じるものであると論じている。

森田のいじめの四層構造はいじめ研究において重要な理論であることは論を待たない。多くのいじめ研究は四層構造論を前提とした調査や分析が主であり，現代のいじめ事件等の校内アンケート調査からは，観衆や傍観者と思われる子どもたちの存在が指摘されているからである。

一方で，いじめの四層構造論にはいくつかの課題が指摘されている。

例えば橋本摂子（1999）は従来のいじめ調査がある一時点の固定された集団を前提としている点から，いじめの時間経過とともにいじめの集団の変化[4]について明らかにした。橋本は小学校段階から中学校段階でのいじめの深刻化について，「小学校時におけるいじめ集団は，集団の成員全てがいじめにコミットしているが，中学校時では，いじめの当事者と非当事者との間が分断され，いじめ行動そのものに関心をなくした者達が，傍観者を形成するために，中学校時においていじめが深刻化する」[5]ことを明らかにした。とくに小学校ではいじめ集団の成員すべてが何らかの形でいじめに関与していたが，中学校ではいじめの傍観者の形成プロセスが小学校と異なり，それがいじめを深刻化させるという点は注目に値する。

橋本の研究はいじめの加害者や傍観者が学年進行によってどう変容するのかを明らかにした点で重要である。

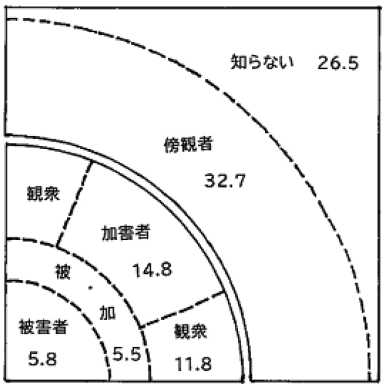

図２　いじめの四層構造の代替モデル
（出典）山本雄二「「いじめの四層構造論」を検証する－「いじめ問題」解体に向けての予備的考察－」『関西大学社会学部紀要第 54 巻第 2 号』2023 年　p.82

また，山本雄二（2023）は森田の四層構造モデルそのものを再検証し，85 年報告書には記載されていたいじめを「知らなかった」層を無視し，知らなかった層を傍観者に含めていた点[6]を指摘している。さらに，山本はいじめの四層構造についてデータをもとに，いじめ被害者を中心とした同心円モデルではなく，クラスの片隅に小さなグループとして被害者，加害者，観衆が存在し，その周りを傍観者，さらにその周りを知らない層が取り囲むといった修正モデルを提示[7]している（図 2 参照）。

2. いじめの傍観者はどのような特徴をもつのか

我が国におけるいじめ研究は数多く先行研究が存在するが，上記の橋本のように「傍観者」に注目した研究は僅少である。いじめ研究の教育社会学的分類（斎藤，2000）は①量的な実態把握

を目指す調査研究，②発生要因を探る研究，③構造的把握を目指す研究，④定義や性格をめぐる研究，⑤言説研究の５つ[8]とされており，いじめの四層構造論は③に該当する。

しかし，③の研究の対象として取り上げられるのは被害者であることが多く，次いで加害者の特徴について分析されたものであり，いじめをはやし立てる観衆や消極的な姿勢をみせる傍観者の特徴や背景を分析したものはごくわずかである。

例えば，森田はいじめの傍観者は加害者や被害者に転じやすい構造にあると指摘したが，それを量的調査によって明らかにした研究は少ない。

本論文では科学研究費基盤研究（B）19H01648「ネットいじめの発生構造に関する日英比較研究－大規模・同時調査による実態分析」（研究代表者：原清治）による大規模調査データをもとにいじめの傍観者の特質について分析を行う。データの概要および分析に使用した変数は下記の通りである。

【調査対象】京都府及び滋賀県の高等学校 132 校 63,657 名
【調査方法】自記式質問紙調査法。HR 時などに実施・回収
【調査期間】2020 年 11 月～2021 年 3 月

表 1　本論文で使用するアンケートデータの概要

	1 年	2 年	3 年	4 年	男性	女性	どちらでもない	答えたくない
n	27,530	26,884	8,994	182	30,574	30,632	646	1,314
%	43.4	42.1	14.2	0.3	48.4	48.5	1.0	2.1

	1 年	2 年	3 年	4 年	男性	女性	どちらでもない	答えたくない
n	27,530	26,884	8,994	182	30,574	30,632	646	1,314
%	43.4	42.1	14.2	0.3	48.4	48.5	1.0	2.1

【分析に使用した変数】すべて 4 件法
Q15-7　ひやかし，からかい，悪口などを言われた（いじめ軽度被害）
Q15-8　仲間外れにされた，集団で無視をされた（いじめ中度被害）
Q15-9　ひどく叩かれたり，金銭をたかられたりした（いじめ重度被害）
Q15-29　LINE 外しをしたことがある（いじめ加害）
Q15-50　いじめを止めに入ったことがある（いじめ仲裁）
Q15-51　成績以外の基準でクラスにランキングができていると思う（スクールカースト明瞭）
Q15-52　いじめを傍観したことがあった（いじめ傍観）

まず，いじめの被害者と傍観者の関係についてクロス集計をもとに明らかにしてみたい。表 2～4 はいじめの被害の深刻度と傍観経験の関係について明らかにしたものである。

表２　軽度いじめ×いじめ傍観

軽度いじめ	とてもあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらといえばあてはまらない	まったくあてはまらない	合計
とてもあてはまる	1101 19.6%	941 16.8%	1045 18.6%	2524 45.0%	5611 100.0%
どちらかといえばあてはまる	811 6.4%	2515 19.9%	3221 25.5%	6093 48.2%	12640 100.0%
どちらかといえばあてはまらない	558 3.6%	2001 12.8%	4431 28.3%	8674 55.4%	15664 100.0%
まったく当てはまらない	725 3.1%	1786 7.6%	3405 14.6%	17458 74.7%	23374 100.0%
合計	3195 5.6%	7243 12.6%	12102 21.1%	34749 60.7%	57289 100.0%

（$\chi^2 = 5803.73$, df＝9, p＜0.000）

表３　中度いじめ×いじめ傍観

中度いじめ	とてもあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらといえばあてはまらない	まったくあてはまらない	合計
とてもあてはまる	705 23.2%	520 17.1%	567 18.6%	1250 41.1%	3042 100.0%
どちらかといえばあてはまる	424 7.7%	1345 24.5%	1421 25.9%	2292 41.8%	5482 100.0%
どちらかといえばあてはまらない	561 5.3%	1766 16.5%	3609 33.8%	4735 44.4%	10671 100.0%
まったく当てはまらない	1501 3.9%	3611 9.5%	6510 17.1%	26478 69.5%	38100 100.0%
合計	3191 5.6%	7242 12.6%	12107 21.1%	34755 60.7%	57295 100.0%

（$\chi^2 = 5661.43$, df＝9, p＜0.000）

表４　重度いじめ×いじめ傍観

重度いじめ	とてもあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらといえばあてはまらない	まったくあてはまらない	合計
とてもあてはまる	397 37.6%	147 13.9%	143 13.5%	370 35.0%	1057 100.0%
どちらかといえばあてはまる	168 10.6%	535 33.6%	365 22.9%	523 32.9%	1591 100.0%
どちらかといえばあてはまらない	266 6.4%	774 18.5%	1696 40.6%	1441 34.5%	4177 100.0%
まったく当てはまらない	2359 4.7%	5790 11.5%	9908 19.6%	32415 64.2%	50472 100.0%
合計	3190 5.6%	7246 12.6%	12112 21.1%	34749 60.6%	57297 100.0%

（$\chi^2 = 4544.69$, df＝9, p＜0.000）

表をみると，どのいじめ被害の項目であっても「とてもあてはまる」生徒はいじめを傍観したことが「とてもあてはまる」割合が高く，いじめの被害と傍観経験には一定の関係がみられることがわかる。

また，いじめの深刻度をみたとき，ひやかし，からかいなどの軽度ないじめを経験している生徒に傍観経験が高いことがわかる。今回の調査ではどちらが先に経験したものなのかは不明だが，何らかのいじめ被害経験のある生徒は傍観経験があると考えられる。

次に，いじめ加害の経験として「LINE 外しをしたことがある」と傍観経験についてのクロス集計についてみてみたい。

表 5　LINE 外し×いじめ傍観

LINE 外し	とても あてはまる	どちらかといえば あてはまる	どちらといえば あてはまらない	まったく あてはまらない	合計
とても あてはまる	715 24.5%	372 12.7%	433 14.8%	1401 48.0%	2921 100.0%
どちらかといえば あてはまる	260 7.3%	979 27.7%	897 25.3%	1404 39.7%	3540 100.0%
どちらかといえば あてはまらない	335 4.5%	1224 16.5%	2784 37.5%	3088 41.6%	7431 100.0%
まったく 当てはまらない	1742 4.2%	4415 10.6%	7618 18.3%	27743 66.8%	41518 100.0%
合計	3052 5.5%	6990 12.6%	11732 21.2%	33636 60.7%	55410 100.0%

（$\chi^2 = 5138.67$, df = 9, $p < 0.000$）

これをみると，いじめ被害経験よりは小さいが，いじめ加害経験もいじめの傍観経験と一定の関係がみられる。

これらの結果から，現代のいじめであっても森田の四層構造論は一定の説明力をもっていることが確認できる。現代の高校生におけるいじめの実態を捉えたとき，いじめの被害経験のある生徒，加害経験のある生徒，どちらも「とてもあてはまる」生徒ほど傍観経験があり，いじめの役割が入れ替わる実態について指摘できるのである。

それでは，森田の四層構造論ではあまり大きく取り上げられなかったいじめを止める役割であるいじめの仲裁者とのクロス集計についてみてみたい。

表６　いじめ仲裁×いじめ傍観

いじめ仲裁経験	とてもあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらといえばあてはまらない	まったくあてはまらない	合計
とてもあてはまる	833 30.1%	419 15.2%	484 17.5%	1028 37.2%	2764 100.0%
どちらかといえばあてはまる	449 7.3%	1928 31.5%	1773 28.9%	1975 32.2%	6125 100.0%
どちらかといえばあてはまらない	510 3.8%	2268 16.7%	5741 42.4%	5025 37.1%	13544 100.0%
まったく当てはまらない	1392 4.0%	2619 7.5%	4108 11.8%	26624 76.6%	34743 100.0%
合計	3184 5.6%	7234 12.7%	12106 21.2%	34652 60.6%	57176 100.0%

（$\chi^2 = 14163.65$, df＝9, p＜0.000）

これをみると，いじめの仲裁経験はいじめの被害・加害経験よりも強い影響がみられる。いじめの仲裁者が学級にいることである程度いじめの被害が抑止されることが考えられるが，この結果をみると，現代の高校生がいじめ集団のなかでさまざまな立場に立たされているという実態が考えられる。ある時はいじめの被害者に，あるときは加害者に，集団が変われば仲裁者や傍観者になってきたのが現代の高校生の姿であると推測できるのである。

現代の高校生において，いじめに大きな影響を与える項目としてここではスクールカーストとのクロス集計を見てみたい。スクールカーストとはクラス内のステイタス（森口朗，2007），クラス内に暗黙のうちに存在する上位，中位，下位グループという階層分け（鈴木翔，2012）人としてどちらが上かどちらが下か（堀裕嗣，2015）といった学級内での序列を指す用語である。現代の若者の人間関係において大きな影響をもち，この序列内の立ち位置によっていじめのリスクが大きく変動するといった指摘がいくつかの研究で論じられている（鈴木，2012　石井久雄，2014　小原一馬，2021）。

表７　スクールカースト明瞭×いじめ傍観

カースト明瞭	とてもあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらといえばあてはまらない	まったくあてはまらない	合計
とてもあてはまる	715 24.5%	372 12.7%	433 14.8%	1401 48.0%	2921 100.0%
どちらかといえばあてはまる	260 7.3%	979 27.7%	897 25.3%	1404 39.7%	3540 100.0%
どちらかといえばあてはまらない	335 4.5%	1224 16.5%	2784 37.5%	3088 41.6%	7431 100.0%
まったく当てはまらない	1742 4.2%	4415 10.6%	7618 18.3%	27743 66.8%	41518 100.0%
合計	3052 5.5%	6990 12.6%	11732 21.2%	33636 60.7%	55410 100.0%

（$\chi^2 = 8125.07$, df＝9, p＜0.000）

表８　いじめに関する項目の相関係数

		いじめ軽度	いじめ中度	いじめ重度	LINE外し	LINE既読無視	いじめ仲裁経験	いじめ傍観
いじめ軽度	Pearson 相関係数	1						
	有意確率（両側）							
	N	60151	59894					
いじめ中度	Pearson 相関係数	.565	1					
	有意確率（両側）	***						
	N	59894	60061	59852				
いじめ重度	Pearson 相関係数	.297	.387	1				
	有意確率（両側）	***	***					
	N	59838	59852	60085	56622			
LINE 外し	Pearson 相関係数	.153	.177	.236	1			
	有意確率（両側）	***	***	***				
	N	56598	56594	56622	56898	56682		
LINE 既読無視	Pearson 相関係数	.162	.114	.064	.236	1		
	有意確率（両側）	***	***	***	***			
	N	58549	58540	58580	56682	58947	57293	
いじめ仲裁経験	Pearson 相関係数	.214	.242	.232	.177	.084	1	
	有意確率（両側）	***	***	***	***	***		
	N	57367	57367	57388	55471	57293	57672	57176
いじめ傍観	Pearson 相関係数	.261	.251	.211	.213	.146	.351	1
	有意確率（両側）	***	***	***	***	***	***	
	N	57289	57295	57297	55410	57188	57176	57613

ここでは「成績以外の基準でクラスにランキングができていると思う」というスクールカーストがクラス内に存在するかという項目といじめの傍観経験とのクロス集計を行った。結果を見てみると，スクールカーストがクラス内にあると回答している生徒ほどいじめの傍観経験が高くなっていた。例えば，スクールカースト下位の生徒がいじめに気が付いたとして，それを仲裁する

ことは難しい。もし加害者がスクールカースト上位であればより一層声をかけることは難しく，傍観者となってしまうことが考えられる。

上記の点も踏まえ，いじめに関する項目の相関係数を取り出したのが表８である。

これをみると，いじめの傍観経験ともっとも相関がみられるのはいじめ仲裁の経験であり，次いでいじめ被害軽度であることがわかる。いじめの傍観者はいじめにまったく関わっていないのではなく，これまでにいじめの被害や仲裁した経験があるが，いじめの傍観経験もある生徒だと考えられるのである。

次に，いじめの傍観経験を従属変数としたとき，どの項目がもっとも影響しているのかを明らかにするために重回帰分析を行った。その結果が表９である。

表９　いじめ傍観を従属変数とした重回帰分析の結果

	モデル１		モデル２	
	β	有意確率	β	有意確率
（定数）				
いじめ軽度	.118	***	.099	***
いじめ中度	.070	***	.060	***
いじめ重度	.057	***	.054	***
LINE 外し	.105	***	.095	***
LINE 既読無視	.066	***	.055	***
いじめ仲裁経験	.271	***	.249	***
スクールカースト明瞭			.161	***
R^2	.187		.211	
F	2095.33		2080.62	
Sig	***		***	

モデル１は森田の四層構造論を前提としていじめ傍観者のその他の項目の関係を取り出したものである。これをみると，いじめ傍観経験にすべての変数が影響を与えており，もっとも強く影響しているのはいじめの仲裁経験であることがわかる。モデル２は従来の四層構造論にスクールカーストの項目を追加し，現代の若者の人間関係を考慮したモデルである。モデル２であってもすべての項目がいじめ傍観経験に有意であり，いじめ仲裁経験が強く影響している点もモデル１と変わっていない。しかし，モデル２では，いじめ仲裁経験についてスクールカーストの影響が強くなっていることがわかる。つまり，いじめの四層構造論にスクールカーストは影響を及ぼしていることが考えられるのである。

3. いじめ傍観者を抑止するための方略
－フィンランドの KiVa プログラムを参考に－

世界でいじめを「社会問題」としてもっとも早く取り上げたのは北欧諸国であると論じられて

いる（Olweus, D 1998，森田ら，1998　滝充，2007）。森田（2010）はいじめ研究の端緒となるスカンジナビア圏では，当初当事者間として取り扱われていたいじめが，子どもたちの攻撃性だけではなく，エスニシティによる差別にも焦点を当て，結果として，社会的な次元へと引き上げられたこと[9]を指摘している。1960 年代後半からいじめ研究を先進的に行ったオルヴェウス（Olweus, D 1998）は，いじめを①攻撃的な行為，あるいは意図的に「危害を加える行為」，②「繰り返し，長期間にわたって」行われるもの，③力の不均衡によって特徴づけられる[10]と定義した。1985 年に我が国で定められたいじめの定義はこのオルヴェウスの定義を参考に作成されている。オルヴェウスは 1983 年にノルウェーで実施された大規模いじめ調査から，男子には直接的ないじめの被害者になりやすく，女子が被害者となるいじめのかなりの数は男子によって行われていた[11]ことを明らかにした。スウェーデンやノルウェーを中心としたいじめ研究や 1980 年代に相次いで発生したいじめ自殺事件[12]の結果，ノルウェー政府は 1983 年から全国の小中学生を対象としたいじめ防止キャンペーンを始めている。この時にオルヴェウスが実施したアンケート調査では，ノルウェーの小中学生の約 15% がいじめの加害者もしくは被害者としていじめに恒常的にかかわっていること[13]が明らかにされている。

1980 年代には日本をはじめとしたいくつかの「いじめ先進国」において，子ども間での暴力行為や心理的な圧力をかける行為が相手の心身に大きな影響を与えることについて，問題提起されている。それは 1990 年代には欧米に広がり，「いずれの文化や社会を越えて普遍的にみられる現象」[14]であり，対応策が必須であるという認識が広がった。こうしたいじめ防止の観点からさまざまないじめ対策プログラムが開発された。北欧のいじめ対策プログラムはいじめ研究の黎明期から知見を集めている点や，その効果について評価されている点から，他の国に多く実践されている。そのうちのひとつがフィンランドの KiVa プログラムである。

オルヴェウスの研究フィールドであったスウェーデンやノルウェーと異なり，フィンランドではいじめに対する研究関心は必ずしも高くなかった。フィオークビスト（Bjorkqvist, 1998）は 1995 年にフィンランドの教員養成の大学において学生からの特別の要請にともない，いじめ対策のコースを実施したこと[15]を報告している。フィンランドでいじめが社会問題化したのは他の北欧諸国よりも少し後の 1990 年代初頭である。この時期に他国と同様にいじめに関する痛ましい事件が続いたことで，フィンランド政府は『学校の安全確保に関する法』を 1999 年に制定し，2003 年の法改正には各学校においていじめ対策の行動計画策定を義務づけたのである（Salmivalli et al., 1996　北川裕子・小塩靖崇・股村美里・佐々木司・東郷史治，2013　廣田万里香，2018　日野陽平・林尚示・佐野秀樹，2019）。

こうしたいじめに関する法整備や各学校でのいじめ行動指針を義務づける動きは 2013 年の『いじめ防止対策推進法』以降の我が国と同様であるが，フィンランドでは各学校でプログラム開発や効果検証を行う負担の大きさから，フィンランド教育省がトゥルク大学にいじめ防止いじめ防止プログラムの開発を委託した。それが KiVa プログラムである。（Salmivalli et al., 2010

北川・小塩・股村・佐々木・東郷，2013　仁平，2017　廣田，2018　日野・林・佐野，2019）

KiVa プログラムは，①予防，②介入，③モニタリングという 3 つの主要な要素（7）に基づいており，プログラムは義務教育期間で継続され，3 グループ別（1-3 年生，4-6 年生，7-9 年生）に各学齢に適した内容で構成されている。ここではそれぞれについて詳しく見てみたい。

3-1. 予防

全生徒を対象とし，いじめの防止に焦点を当てており，生徒の授業やオンラインゲームなどを実施している。KiVa プログラムの中核となっているのがこの予防対策である。生徒全員がいじめにおける集団の役割に気付き，いじめ被害者に対する共感を助長し，いじめに立ち向かい，いじめ被害者をサポートすることによって生徒の自己効力感を促進させることであり，いじめ予防を目的としている。

フィンランドではいじめの集団での役割について，森田の四層構造論よりも多い 6 つに分類し，KiVa プログラムでは傍観者を擁護者にするためのプログラムであると論じられている。（仁平，2017）

1）いじめ手・いじめっ子（bully）：積極的にいじめを主導して攻撃を行う実行者
四層構造論の「加害者」に該当
2）犠牲者（victim）：いじめの標的にされた者，四層構造論の「被害者」に該当
3）いじめ助手（assistant）：いじめが始まったときに，犠牲者を取り囲んで逃げ道を塞ぐなど，いじめに積極的に加わる者，四層構造論にはない役割
4）強化者（reinforcer）：一緒に笑う，囃し立てるなど，いじめ側にとって報酬になるような反応をする者，四層構造論の「観衆」に該当
5）アウトサイダー・傍観者（outsider）：かかわらないようにする者，知らんふりをする者
四層構造論の「傍観者」に該当
6）擁護者（defender）：大人や教師に言いに行ったり，いじめ側にやめろといったりして，犠牲者を守ろうとする者，四層構造論の「仲裁者」に該当

全体を対象とした取り組みの主要なねらいとして，北川ほか（2013）は以下の 3 つにまとめている[16)]。

1）生徒全員が，いじめが続くことに対する集団の役割について気付くこと
2）いじめ被害者に対する共感の助長
3）いじめに立ち向かい，いじめ被害者をサポートし，それによって生徒の自己効力感を促進させること

いじめ予防のプログラムでは担任教師が 1 学年あたり 10 回（計 20 時間）のレッスンを行う。全体の介入は 1 か月に 1～2 回程度であり，生徒指導やショートフィルム視聴を含む「バーチャル環境学習」などを実施[17]している。内容はショートフィルム視聴，ロールプレイ，グループワーク，ディスカッションやブレインストーミングなどである。初等教育では授業のなかで実施されているが，中等教育ではいじめ防止のために特別な日程を組んで実施している[18]。プログラムでは仲間がいじめられていることに気づく方法や仲間を助ける方法，いじめられた時に受けることができる支援など，いじめを見たり，被害を受けたときの駆け込み先を学ぶことができる[19]。また，授業だけではなく，教師が休み時間に黄色いベストを着用して子どもたちの様子を見守り，KiVa プログラムのポスターを掲示し，いじめについてのオンライン・アンケート調査を実施し，保護者にプログラムのハンドブックを配布する活動も特徴的である。

3-2. 介入

予防のプログラムではクラス全体を対象とした取り組みであったが，介入のプログラムでは，特にいじめに関与した児童・青少年を対象としており，いじめをなくすための解決策に焦点を当てたツールを学校や生徒に提供すること[20]を目的としている。いじめが実際に起きたとき，学校ではその状況を改善するための介入方法を身に付けるトレーニングを受けた「KiVa チーム」が構成され，包括的で詳細なマニュアルをもとに担任と協力して個々のいじめに介入・対応する。介入の手続きとしては①KiVa チームに報告された件がいじめなのかそうでないのかを判断する。②被害者との個別の話し合いを行う。③加害者たちとの話し合いを行う。④いじめ加害者たちとのグループでの話し合いが行われ，前回の話し合いでした約束について確認する。⑤いじめ被害者とのフォローアップミーティングを行い，いじめが本当に落ちついたかどうかの確認をする。⑥状況の改善がみられたら，再び加害者とグループで話し合いを行い，いじめを二度と起こさないためにはどうしたらよいのかを話し合う[21]となっている。担任はいじめの発生したクラスの中心となる児童生徒を集めて被害者への支援を促すなど，計画的にフォローする。

3-3. モニタリング

KiVa は，生徒と職員の双方を対象とした年 1 回のオンライン調査を通じて，学校の状況をモニタリングするツールを提供している。また学校間のネットワークを構築するために 3 つの学校の KiVa チームは定期的にミーティングを行い，インターネット上でディスカッションすることも可能となっている[22]。これらのフィードバックにより，学校はいじめ防止活動を改善するための情報を得られるような仕組みになっている。

KiVa プログラムを概観すると，「いじめが友人間の力の不均衡から生じる」というオルヴェウスの定義を踏まえつつ，「優位で力のある位置に立つための競争によって引き起こること，集団での現象であること」，「傍観者がいじめを目撃した時にいかに行動するかが，いじめの制止や

維持に重要な役割を担う」[23]という理論背景をもとにプログラムが設定されている。

KiVa プログラムに関する我が国の先行研究を概観してみると，その評価はおおむね好意的であると判断できる。「KiVa プログラムのように効果の実証を伴ったいじめ対策プログラムを検討・開発し，全国に広めていくことがわが国でも必要」[24]，「集団とその雰囲気および構造・制度等の外的要因にも働きかけていじめを予防する，いじめ防止プログラムの開発・実施が急務」[25]，「KiVa という効果的なプログラムによって救われる子どもたちは，無数である」[26]など，KiVa プログラムのような効果のあるいじめ防止プログラムの制定は我が国でも必要であるといった論考は多い。

その一方で，KiVa プログラムの課題について指摘している研究も少なくない。例えば KiVa プログラムの開発に携わった Salmivalli らの研究グループ（Garandeau et al., 2021）は KiVa の実施 9 ヶ月後に実施したアンケート調査から，KiVa プログラムが他人の感情を読みとり，それを共有する能力として定義される情動的共感は，生徒の性別，地位，初期の共感度，いじめのレベルに関係なく，また学校のタイプや学級のいじめ規範に関係なく，その程度を高めることができることが示唆された一方で，他者の視点を理解する能力と定義される認知的共感にはその効果が認められなかったという結果を明らかにしている[27]。

また 2009 年から 2015 年まで KiVa プログラムを実施した学校関係者を対象とした調査から，②の個々のいじめへの対応時にプログラムが推奨するアプローチが有効である一方で，学校関係者が独自の適応を用いたり，どのアプローチを用いたか特定できない場合には，話し合いの効果は低く，いじめの事例に適応したアプローチではその効果が弱まるといった結果を明らかにしている[28]。

さらに，プログラムの効果は学年の上昇にしたがって安定した結果が得られない[29]こと，フィンランドの学校を訪問した研究グループは視察校で KiVa プログラムが導入されておらず，さまざまな専門家が学校に配置されている一方で，一般の教員の研修システムが体系的とは言い難いといった点[30]を指摘する声もある。

4. これからのいじめ対策に求められる視点とは何か

KiVa プログラムはクラス全体で傍観者になる子どもたちに向けて，擁護者となることを中核としており，その効果についてはフィンランドを中心にある程度検証されている。しかし，このプログラムをそのまま日本に導入する流れには至っておらず，我が国もフィンランドと同様に教員研修のひとつとしていじめ対策のプログラムは策定されておらず，いじめ対策そのものは学校や教員の力量に左右されている側面は小さくない。

KiVa プログラムのようにいじめの傍観者を仲裁者にする取り組みが日本でも求められる一方で，コロナ禍以降の子どもたちの質的な変化について大人たちは注意を払う必要がある。

金間大介（2022）は現代の若者の志向の変化について「最も公正な分配方法」という問いを用いて明らかにしている[31]。金間は①平等分配，②必要性分配，③実績に応じた分配，④努力に応じた分配という 4 つの選択肢から，1995 年の SSM 調査ではもっとも選択されていた④努力に応じた分配（男性 51.2%，女性 62.2%）が現在の大学生（男性 25.5%，女性 24.8%）には支持されておらず，以前ならもっとも少ない割合であった①平等分配（男性 5.2%，女性 7.5%）がもっとも支持されている（男性 49.0%，女性 53.2%）ことを論じている（図 3 参照）。

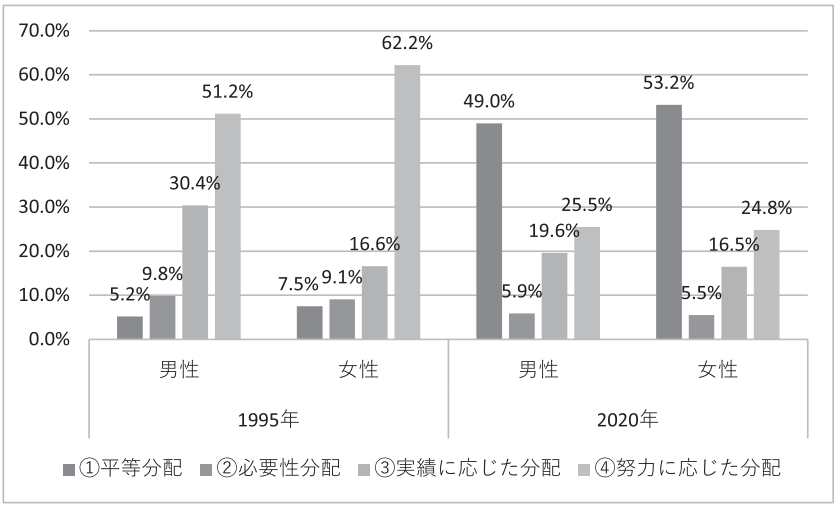

図３「日本人が思う最も公正な分配方法」の推移
（出典）金間大介（2022）『先生，どうか皆の前でほめないで下さい　いい子症候群の若者たち』東洋経済新報社　pp.43-47 より筆者作成

金間はこの結果から，若者の価値観が大人のそれとは大きく異なってきている点について言及している。とくに「いかなる理由にかかわらず，分配量を変えること自体に違和感を持つ」若者が多くなり，②必要性分配を選択する若者や④努力に応じた分配が大きく減少している点に注目している。この背景について金間は若者が競争を忌避し，自分だけが与えられることに対して違和感を抱き，自分だけが何らかの利益を得る状態が苦手である[32]と論じている。

金間の研究をもとにいじめ研究を考えたとき，これからのいじめの姿が大人社会を投影したものではなく，競争を嫌い，平等に分配することを良しとする子どもたちの価値観から生じる新たないじめが引き起こされる恐れが生じる。現代の学校で発生しているいじめの多くは，他者に対する羨望や嫉妬といった競争原理に基づくものが多くを占めており，それは大人社会に氾濫しているモラルハラスメントと同様のケースが多い。いじめであれ，ネットいじめであれ，大人がいじめをしている姿を見た子どもたちが大人を模倣して行っているものであるとも解釈できる。

しかし，金間研究を踏まえると，現代の若者は大人世界の前提となる競争を忌避し，自分が与えられることに違和感を抱くメンタリティを有するため，羨望や嫉妬といった感情を持ちにくい。競争を避ける若者が目立つことやより良いことを避ける志向を持つのであれば，いじめをは

やし立てる観衆や抑止するために必要な仲裁者はより少なくなり，いじめの傍観者がより増えてしまうのではないだろうか。

これまでのいじめ研究において，いじめの理論研究において大きな役割を果たしていたのはデュルケムのアノミー論を土台としたマートンの緊張理論[33]である。マートンは「大多数の社会成員に共通する願望」である「文化的目標」を達成するための合法的な手段として「制度化された手段」があり，子どもたちが一生懸命に勉学にいそしみ，試験に合格するといった行動によってその目標が達成される[34]と考えた。しかし，制度化された手段そのものへの機会に乏しい貧困層は「文化的目標」を遂行するために非行や逸脱行為を行うと論じた。すなわち，いじめという行為は学級の構成員の願望である「文化的目標」を達成するために行われる逸脱行為であるというのひとつであるという考え方である。とくに1980年代のいじめは学級の秩序を保つために，学級内で著しく何らかの能力が劣る，もしくは優れている子に向けて一方的に身体的な行為や無視や仲間外れなどの心理的な行為を行っており，いじめ研究ではそれを学級内での逸脱行為とみなしていた。その背景にあったのは学級内での「文化的目標」を遂行するためにいじめるという学級の秩序の維持である。学級であれ，会社であれ，いじめに相当する行為の多くは緊張理論によって説明できるものが多くを占めている。

しかし，金間データが示すのは，若者を含めた子どもたちの多くがいじめを傍観したり，そもそもいじめを知らなかったという山本が指摘する傍観者に含まれてしまった「いじめを認知していない層」の増加である。KiVaプログラムはいじめを把握しつつも見ないふりをしていた傍観者にとっては有効だと考えるが，そもそもいじめを知らなかった層に対して効果的であるとは言い難いのである。

KiVaプログラムがある一定のいじめ防止プログラムとして効果をもっている点について，その意義は大きいといえる。しかし，これからのわが国の子どもたち，とくに競争を避け，目立つことを徹底的に避ける志向をもつ子たちに対して，プログラムは効果を持ち得るだろうか。それは道徳の授業を受けて「いじめをすることはよくないことだ」と理解しつつも，現実世界でいじめをしてしまう子どもを生み出していることと変わらない。また，学級内でのいじめをまったく知らなかった層にとって，いじめを白日のもとにさらす行為そのものがさらなるいじめの呼び水になるというリスクも有している。日常生活と学校での学びが連動しないプログラムでは絵に描いた餅となってしまう。子どもたちの情動的共感だけではなく，認知的共感も高めるためのプログラムが今後より一層必要となるのではないだろうか。

注

1）森田洋司・清永賢二『いじめ－教室の病い』金子書房　1986年　pp.48-52

2）森田洋司「いじめの集団力学」『岩波講座「現代の教育」第4巻　いじめと不登校』岩波書店　1998年　pp.115-134

3）森田・清永，前掲書　pp.50-51

4）橋本摂子「いじめ集団の類型化とその変容過程」『教育社会学研究第 64 集』1999 年　pp.123-126
5）同上，pp.134-139
6）山本雄二「「いじめの四層構造論」を検証する－「いじめ問題」解体に向けての予備的考察－」『関西大学社会学部紀要第 54 巻第 2 号』2023 年　pp.74-75
7）同上，pp.82-86
8）斎藤知範「非行的な仲間との接触，社会的ボンドと非行行動」『教育社会学会研究』第 71 号　2002 年　pp.131-132
9）森田洋司『いじめとは何か』中公新書　2010 年　pp.10-16
10）オルヴェウス「スウェーデン」森田洋司監訳『世界のいじめ』金子書房　1998 年　p.97
11）オルヴェウス「ノルウェー」森田監訳　前掲書　pp.124-125
12）同上，pp.119-120
13）同上，p.122
14）森田洋司『世界のいじめ　各国の現状と取り組み』金子書房　1998 年　p.136
15）フィオークビスト・オスターマン「フィンランド」森田監訳　前掲書　p.149
16）北川裕子・小塩靖崇・股村美里・佐々木司・東郷史治「学校におけるいじめ対策教育－フィンランドの KiVa に注目して－」『不安障害研究第 5 号』2013 年　p.33
17）廣田万里香「北欧のいじめ対策－フィンランド，ノルウェーのいじめ対策プログラム－」『子ども学研究紀要第 6 号』p.63
18）北川ほか，前掲書　pp.31-38
19）同上，pp.31-38
20）同上，p.33
21）廣田，前掲書　p.64
22）北川ほか，前掲書　pp.33-34
23）同上　p.32
24）同上，p.38
25）日野陽平・林尚示・佐野秀樹「いじめの心理学的・社会学的要因と予防方法――先行研究のレビューと政策・実践・研究への提言――」『東京学芸大学紀要総合教育科学系 I 第 70 号』2019 年　pp.131-158
26）仁平義明（2017）「エビデンスに基づく「いじめ対応」最前線」『白鴎大学教育学部論集第 11 号』2017 年　p.69
27）Claire F Garandeau 1, Lydia Laninga-Wijnen 2, Christina Salmivalli 1 3 2021
Effects of the KiVa Anti-Bullying Program on Affective and Cognitive Empathy in Children and Adolescents Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology Volume 51, 2022—Issue 4
（https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/15374416.2020.1846541 2024. 1. 4 アクセス）
28）Eerika Johander, Tiina Turunen, Claire F. Garandeau & Christina Salmivalli Different Approaches to Address Bullying in KiVa Schools: Adherence to Guidelines, Strategies Implemented, and Outcomes Obtained Prevention Science（2021）22: 299-310
29）廣田，前掲書　p.66
30）小玉有子・中村孝・高橋あつ子・金山健一・栗原慎二「包括的アプローチの枠組みから見たフィンランドの教育～生徒指導先進地域の実践比較研究～」『弘前医療福祉大学紀要第 5 号』2014 年　p.89
31）金間大介『先生，どうか皆の前でほめないで下さい　いい子症候群の若者たち』東洋経済新報社　2022 年　pp.43-50
32）同上，pp.50-56
33）作田誠一郎「第 6 章　少年非行と教師との関わり」原清治・山内乾史『教育社会学』ミネルヴァ書房　2020　pp.83-84
34）同上，p.83

参考文献

北川裕子・小塩靖崇・股村美里・佐々木司・東郷史治「学校におけるいじめ対策教育－フィンランドのKiVaに注目して－」『不安障害研究第5号』2013年
斎藤知範「非行的な仲間との接触，社会的ボンドと非行行動」『教育社会学会研究』第71号　2002年
仁平義明「エビデンスに基づく「いじめ対応」最前線」『白鴎大学教育学部論集第11号』2017年
仁平義明「「いじめ対応」3つの考え方－傍観者重視のKiVaプログラム・折ると婦の首謀者介入モデル・文部科学省の方針－」『星槎大学紀要共生科学研究No.15』2019年，pp.24-44
橋本摂子「いじめ集団の類型化とその変容過程」『教育社会学研究第64集』1999年
原清治「社会学から問う現代の学級崩壊：「荒れ」としての崩壊から，内面的な「分断」へ」『授業づくりネットワーク第36号』pp.20-25
原清治「これからの社会福祉の展望　子どものSNS利用とネットいじめ」『月刊福祉第106巻10号』2023年，pp.46-49
日野陽平・林尚示・佐野秀樹「いじめの心理学的・社会学的要因と予防方法――先行研究のレビューと政策・実践・研究への提言――」『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅰ第70号』2019年
廣田万里香「北欧のいじめ対策－フィンランド，ノルウェーのいじめ対策プログラム－」『子ども学研究紀要第6号』pp.57-68
森田洋司・清永賢二『いじめ－教室の病い』金子書房　1986年
森田洋司『世界のいじめ　各国の現状と取り組み』金子書房　1998年
森田洋司「いじめの集団力学」『岩波講座「現代の教育」第4巻　いじめと不登校』岩波書店　1998年
山本雄二「「いじめの四層構造論」を検証する－「いじめ問題」解体に向けての予備的考察－」『関西大学社会学部紀要第54巻第2号』2023年

付記

本論文は佛教大学総合研究所共同研究「教師の指導力“気づき”の解明のための国際的・学術的研究―教育実践学と脳科学の融合」（研究代表者　松村京子　2020-2023），科学研究費補助金基盤研究（b）19H01648『ネットいじめの発生構造に関する日英比較研究』（研究代表者　原清治　2019-2021）および科学研究費補助金基盤研究（b）22H00981『大規模パネルデータに基づく青少年の「生きづらさ」の形成要因に関する総合的研究』（研究代表者　原清治　2022-2027）のデータを使用した研究成果の一部であり，日本教育社会学会第75回大会（2023. 9. 12，於：弘前大学）における発表をもとに加筆修正したものである。なお，本稿は要約および4を原が，1～3を浅田が担当したが，その責任は両者が等しく負うものである。

（はら　きよはる　共同研究研究員／佛教大学教育学部教授）
（あさだ　ひとみ　京都文教大学臨床心理学部准教授）